

# 随想 ずいそう



「應」

前田 和子



本箱の整理をしていましたら、十数年も前に発行された荻原井泉水の俳句雑誌「層雲」が出てきました。黄色く変色したかび臭いページをめくっていきますと、

應々といへどたたくや雪の門

去来

の句が目につきました。「應々」とは「おう」「おう」と繰り返して返事をしているが、それが相手には聞こえないとみえて重ねて門をたたいているという意味だと思います。

この「應」の字について、荻原井泉

水は「和」という意味もあり、「協」という意味もある。彼我一如、二者即一の気持ち「應」であると解釈を加えておりました。

たしかに考えてみますと、親しく心の通い合う人にとつては、くどくどしたことはいらぬように思います。

「おう、そうだ」「おう、そうしよう」で話がまとまるものです。また、久しぶりに友だちと会ったときに発することばとしてよく耳にするものに「やあ」とか「おう」とかあります。これが「應」の気持ちであり、そして答える心だと思えます。

わたしたちは、いつもこの「應」を求めて生活をしているように思います。答えることばがかえって来ないときには落胆し、「應」の得られたときは喜びを感じ、一日一日を過ごしているような気がします。

今からかなり前の話ですが、夏休みの数日を利用して、友人と三人で磐梯山に行つたことがありました。郡山で磐越西線に乗りかえて緑の響きあうような山々や溪谷を車窓に見ながら、しばらくぶりで会つた友と、それぞれの近況報告をし合う楽しみにふけてい

ました。

汽車は各駅ごとに止まりながらゆくりと走りまわりました。いくつかの駅を過ぎたころ、わたしたちのボックスに一人の同年輩かなと思われる女性が座りました。間が悪そうに遠慮がちに座っている様子を視線の端にとらえながら話に花を咲かせておりましたが、こちらは三人だという気易さもあって、「あなたはどうですか」など時々話しかけたりしましたが、気乗りのしない顔をしてくつむいていました。お菓子などをすすめても、その処置に困つたように手にもつていただけでした。

夏休みも終り、また普段の生活にもどつたある日、一通の手紙が届きました。差出人の名前に心当りがなく、不審に思いながら読んでいきますと、夏の日の車中でのお礼のことばと楽しかったという感想が述べてありました。わたしのリユックサクに書いてあつた住所氏名をメモしておいたとのことでした。

「應」には、すぐ返ってくる「應」もあれば、長い時を経て返ってくるものもあるでしょう。とにかく、心に銘すべきことばだとあらためて考えさせられました。

(浪江町立浪江中学校教諭)



幸せを願う

佐藤 志良



養護学校に勤めて八年目を迎えた。あつという間に過ぎてしまつて短かかつた。夢中で過ごせたためかもしれない。

「先生、今日数学あるよ」「○曜日数学あるよ」と廊下で会うたびに声をかけてくるS君は中学三年生である。たし算のやり方がわかつて、自分で答が出せ、あつたという喜びを体で表わしている。

T君、H君は正、負の数の計算に夢中である。Y君は方程式、関数の問題へとどんどん進んでいく。

「もうできちゃったよ。もつと問題だして」「あと五分あるから、これやっちゃうよ」と時間いっぱいがんばっている。

勉強ができない、やる気が見られないと生徒をなげくことは多い。果たし